

紙 碑

本会顧問・亀谷栄先生のご逝去を悼む

本会顧問亀谷栄先生は、白内症を患われ、手術をうけ、その後比較的健康的な日々をお孫さんに囲まれて送られていたが、昨年12月8日家族の皆さんとテレビを見て、眠くなったと途中で就寝されたが、真夜中にウンとうなられて奥様がどうしたのとの声にもついに応えることなく85歳の生涯を閉じられた。医師の診断は心不全であった。先生の北海道の地理学界、教育界における功績は多大であり、その温容を顧みる時、切々として哀惜の情とどめ難きものがあり、追悼の一文を草して先生の功績をたたえ、冥福をお祈りしたい。

亀谷先生は明治39年、北海道寿都郡寿都町で生まれ、昭和3年北海道函館師範学校(現北海道教育大学函館分校)本科一部を卒業し、札幌市山鼻尋常小学校訓導として勤務し、その後学問に対する夢止まず一念発起して昭和6年東京高等師範学校文科四部に入學し、途中病魔に犯されながらも療養のすえそれを克服し、昭和11年同校を卒業された。卒業と同時に母校でもある北海道函館師範学校教諭として戻られ、その後校名の変更等があったが、一貫して北海道教育大学を昭和44年に退職されるまで勤務された。昭和44年退職後函館大学商学部に乞われ、同校教授として昭和54年3月まで勤務された。

北海道教育大学在職中には全学の方針の決定機関である代議員会の代議員をはじめ多くの分校内の役職を経験された。特に昭和38年から昭和44年3月の退職時まで務められた北海道教育大学教育学部附属函館小学校・中学校校長時代には歴代校長の中でもっとも熱心に児童の指導に当たられ、早朝交通安全の旗をもって児童の登校の安全に努められ、熱心さの余り自らが車に接触されて怪我をされたとのエピソードまで残されている。

先生は函館分校の地理学教室の創設をされると同時に学生の指導にも熱心に取り組み、多くの有能な人材を北海道教育界に送られた。先生の名調子の講義は今日でも教え子に強烈な印象として残り、亀谷節として伝えられている。体を左右に揺すって歩くことから、「ガッタさん」の愛称で呼ばれていた。

先生はこのように優れた教育者であったと同時に、優れた地理学研究者でもあった。北海道地理学会の創設には他の道内在住の地理学研究者と共に参画され、今日の本会の礎を築かれた。また、函館分校においても教え子を中心として函館地理学会を創設され、地理教育の普及と充実に努められた。

先生は生まれが漁村であったことから、漁村の成立、漁

村の地域構造に関して早くから興味をもたれ、生まれ故郷の寿都町をはじめ道南の各漁村の実地調査をされ、いくつかの優れた論文を発表されている。特に北海道教育大学紀要に掲載の「寿都湾臨海漁村の地理学的研究—特にその崩壊について」は、にしん漁業で支えられてきた漁村がにしん漁の衰退に従ってどの様に崩壊したかの過程・メカニズムを明らかにした優れた論文としてあげられる。また、先生は地図や地誌が地理学にとっていかに重要であるかを説かれ、北海道の多くの地図や地誌の編纂にたずさわられた。昭和25年「北海道大地図」日本書院、昭和35年「北海道主要部大地図」日本教図、昭和36年日本の地理「北海道」岩波書店などの編纂・執筆にあられた。晩年先生は町内会の老人クラブの世話役を務められ、小旅行や散歩など楽しまれておられたが、足が不自由になられてからは付近の散歩とお孫さんの相手をされることを楽しみとされていたようだ。かつて新聞の虫と言われるほどよくすみずみまで読まれ、切り取りもされていたが、これも目を患われてからはできなくなったと聞いている。先生にお会いすると、その度に「函館の将来は」「北海道の現状は」の御高説を承ったが、その話もう聞かれない。しかし、先生の蒔かれた種は確実に大きく育っています。先生、いまどうぞ安らかに眠り下さい。

(奥平 忠志)